

# (国際交流のコーナー) 「欧米文化への入り口」の活用

岩崎和彦

## 1 はじめに

一般に学習は「知る」から「わかる」へと進んでいきます。生徒たちは授業を通してさまざまなことを知ります。そしてその「知る」という学習の過程で、生徒たちはさまざまな疑問や課題をもちます。このさまざまな疑問や課題を、生徒たちが主体的に学習することで、「知る」から自らが疑問や課題を解決できる「わかる」につなげることができると考えます。

この「知る」「わかる」ために、実は「気づく」という学習があるのではないのでしょうか。生徒たちが興味・関心をもって「気づいた」ことを、授業で確認する取り組みや「気づいた」ことから自らが疑問に思ったことなどを解決する取り組みが、生徒たちの「知る」につながり、「わかる」につながられます。

このことは生徒たちが歴史や歴史の学習が好きになる取り組みにつながるものと考えます。

帝国書院『中学生の歴史(最新版)』第5章「近代日本の歩みと国際社会」p.138～139(国際交流のコーナー)「欧米文化の入り口」の授業での活

用例から、提案したいと思います。

## 2 授業実践

19世紀後半の開国と明治維新以降のわが国の近代化の歴史について、世界の動きとのかかわりの中でとらえ、この時代のわが国の歴史が欧米諸国のアジアへの進出など複雑な国際情勢の中で、諸外国との親密なかかわりをもちながら進展してきたことに気づかせるために、その前提となる生徒たちの疑問や課題を、資料「ハイカラの最先端—神戸」 「最大の貿易港—横浜」から導き出したいと思います。

### ○事実に「気づく」

生徒たちはこの二つの資料を見て、さまざまなことに気がつきます。

#### 「ハイカラの最先端—神戸」から

- ・日本髪、ちょんまげ、和服
- ・洋服、帽子、傘
- ・自転車、一輪車、馬車、人力車
- ・帆船、蒸気船
- ・オランダ国旗、イギリス国旗、日の丸らしき旗
- ・外国人



神戸港のようす (帝国書院『中学生の歴史(最新版)』p.138②)

▼⑧ 横浜港のようす 100戸に  
満たない小さな村だった横浜は、  
開港後、日本最大の貿易港とな  
りました。



横浜港のようす（帝国書院『中学生の歴史（最新版）』p.139 ⑧）

- ・洋館、役所
  - ・街灯
- 「最大の貿易港 — 横浜」から
- ・日本髪、ちょんまげ、和服
  - ・洋服、帽子、傘
  - ・馬車、人力車
  - ・帆船、小舟、蒸気船
  - ・鉄道、蒸気機関車、駅舎
  - ・オランダ国旗、イギリス国旗、デンマーク国旗、  
フランス国旗、スイス国旗、アメリカ国旗
  - ・外国人
  - ・洋館、石造りの橋
  - ・公園
  - ・灯台らしきもの
  - ・電線、電柱

など、生徒たちは一人ひとりの個に応じて、さまざまに気づくことができます。生徒たちは資料を身近なものとしてとらえることができます。また生徒たちは積極的に、「自信」をもって発

言することができます。この一人ひとりの個の「自信」は授業では大きなエネルギーになるのではないのでしょうか。

#### ○地元の歴史に「気づく」

自分が生活しているところでは、この欧米文化の影響がどのような形であったのかを「気づく」ことで、生徒たちはこの時代を身近なものに感じることができるのではないのでしょうか。

・欧米文化の影響のあったと思われるものはなにか。  
(洋館、外国人の足跡、鉄道、食文化など)

#### ○疑問に「気づく」

生徒たちが「気づいた」ことから、自らが疑問に思ったことを明確にしておくことは、この後の第5章の授業を進める上で、生徒たちが積極的に「知る」学習、「わかる」学習につなげられるのではないのでしょうか。

- ・鉄道はいつ日本にできたのだろうか。
- ・街灯はいつ日本にできたのだろうか。
- ・洋服はいつごろから着ていたのだろうか。
- ・洋館はいつごろから建てられたのだろうか。

- ・「なぜ」、100戸に満たない小さな村だった横浜を開港したのだろうか。
- ・「なぜ」、1858年に江戸幕府は欧米諸国と条約を結んだのだろうか。
- ・「なぜ」、函館、新潟、横浜、神戸、長崎の五つの港を開港したのだろうか。
- ・「なぜ」、欧米諸国は鎖国状態の日本を開国させたのだろうか。
- ・横浜港は、長崎の出島のようなつくりだったのだろうか。
- ・この欧米文化は、庶民生活にどのような影響を与えたのだろうか。
- ・開国、欧米諸国は、近代の政治、経済、社会などにどのような影響を与えたのだろうか。
- ・鉄道は近代化にどのような影響を与えたのだろうか。
- ・朝鮮、中国、琉球とはどのような外交関係だったのだろうか。

- ・自分が生活しているところは、この時代はどのようなようすであったのだろうか。
- ・自分が生活しているところは、欧米文化の影響があったのか、なかったのか。

○ノートに「記録」

「気づいたこと」
・ ・ ・
「地元で気づいたこと」
・ ・ ・

「疑問に思ったこと」この章で学びたいこと
・ ・ ・
「学習を通して」「課題の解決に向けて」
・ ・ ・

この「気づく」ことをノートに記録させます。記録することで、観点別学習状況の具体的な評価においても、興味に基づいて疑問や課題を設定しているか、意欲的に調べているか、疑問や課題に対して自分の考えがあるかなどの評価規準で、関心・意欲・態度の評価を行うこともできます。疑問や課題の解決のために、自分なりの考えをもって仮説を立てているか、考察をしているかなどの評価規準で、思考・判断の評価を行うことができます。

**3** まとめ

授業が、授業者が一斉授業で知識を伝達する授業、教科書を読みながら進めていく授業になっていることはないでしょうか。

この「気づく」を通して、納得して生徒自身が知識を主体的に自らのものにしたとき、知識などを「知る」から自らが疑問や課題を解決できる「わかる」への学習となると考えます。

つまり、生徒たちが、調べ方やまとめ方、問題解決の方法、思考力や判断力、表現力などの技能や能力を身につけることです。

授業者が生徒たち一人ひとりの「気づいた」疑問や課題を理解することで、授業者は1時間1時間の授業で、生徒たち一人ひとりの個に対応することができます。その結果、生徒たち一人ひとりには「授業に参加できたという充実感」や「理解できたという感動」から、新たな課題の設定や積極的な授業姿勢も生まれてくるのではないのでしょうか。

【参考文献】社会科教育全書42「社会科固有の授業理論」岩田一彦著（明治図書）、社会科教育全書43「社会科の基礎・基本」北俊夫著（明治図書）、「横浜市 教育評価の手引き」（横浜市教育委員会）